をうちて義興の本陣を七重八重に取巻きたり義興今は
はやうでとや徒二十騎計りにて大勝の国を踏敗し
大山寺にて引きのつ不心喜の兵共中相を好の皆
地へ乗入しかば知也へ火をうちて敵閑を合原焼夫を
すかして叫喚の声雷のごとくして逆臣のあるは討死せんとやさんけるを近習老功の
つわものは義興を持の討死すべきあるべしとて取て
返すは義興浦山に濱を廻り小船に乗て国郡
の小國へ落つる小國国郡は義興に味方する
ゆえ

ゆえ両家を送りて義氏物語をえらびて生れ女
童老若男女は焼け嘆の中に切殺されるの体は自も
あるべしれぬ有様なりかくて義興も思ひ寄の事
不可なりで味方あるし家を聞べ敵となりなる
とおもへば鎌倉へ入たり高行きます所を所
〳〵戦ひけるに敵延び得ずして備前国が
謀を知らずして聞と死なん事の口惜さとて
近習の者に義之の本陣へ遣はし報遣けるに其ごと
ず何のあると宣ひけるに近習の士人共申けるは